

山で本当に 危険な生物

～クマ・ハチ・ダニ～



日本山岳遺産基金
JAPAN MOUNTAINS HERITAGE FUND

第2版

クマ

Bear

北海道のヒグマと本州・四国のツキノワグマ、
兩種を合わせて毎年100人以上が事故に遭い、
数名の死者が出ることもある。

■ 出会わないことが重要。

まず、クマの生態を知る。

クマはあらゆる場所にいる！今や、山奥だけで
なく都市近郊の里山を含め、北海
道、本州のあらゆる場所にクマが
出てきている。



1. 食べ物があるところにクマがいる

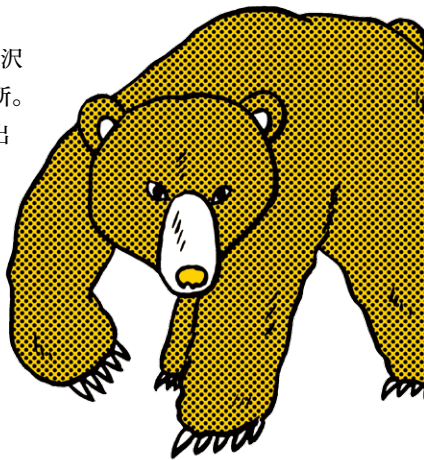
- 春 山菜・若葉や花が大好き。タケノコや山菜が生える森や沢沿い、湿原にも。
- 夏 森に実るさまざまな木の実や高山のお花畑、沢沿い、湿原に生える草を食べる。
- 秋 なによりブナの実やドングリ。木々の実りが悪い年は里に出て、畑の作物や家畜向けの飼料を食べることも。ちなみに季節を問わず肉が好きで、シカなどの死体は要注意。

2. 危ない場所

見通しが利かないところ、沢沿いで音が聞こえにくい場所。お互い気づかず、ばったり出会ってしまうリスクが高い。

3. 危ない時間

朝夕はクマが活発に動く時間。お互い動けば出会うリスクも高くなる。



■クマ除けの方法

音を出す

人の存在を積極的にクマに知らせることは重要。クマ鈴、笛、ラジオが定番だが、逃げないクマもいるし、むやみに音を出していると怒る人もいる…。マナーも重要だ。道具を使わなくても、見通しが利かない場所で手をたたいたり、声を出すことでもOK。グループ登山で、ぺちゃくちゃお話していたら、それはすでにクマ除けになっている。

■出会ったときの対処法

1. ばったり出会ってしまったら

慌てず騒がずゆっくり後ずさって逃げる。



2.気づいたらクマが向かってくる！

完全に襲われる... となったら、ケガを覚悟で戦うことに一定の効果があることは数々の事例から実証済みだが、基本は殺されないために防衛姿勢(下イラスト)を取ってやり過ごす。ポイントは噛みつかれやすい顔と致命傷となる首筋の防護。

3.クマスプレーを使う

商品によって異なるが、射程距離が数メートル(約4～9m)で噴射時間も数秒。効果はあるが、向かってくるクマに対して、安全装置を外し、クマの顔へ冷静に噴射することはかなり難しい。過信は禁物。

■襲われてケガをしたら

出血がひどい場合はタオルなどを使って直接圧迫止血。119番や無線機で救助要請してすぐに病院へ。軽傷でも必ず病院へ。





ハチ

Hornet

国内では毎年20名前後の人がハチに刺されて亡くなっている。死因の大部分はアナフィラキシー・ショックによるもの。

■ 巣に近づかないことが重要

うっかり巣に近づいたり、巣を踏んでしまうと、集団で攻撃をしかけてくる。

1. ハチの巣がある場所

特に危険なスズメバチの仲間は木の枝、崖、土中など。

2. 危ない季節

巣が拡大する初夏から秋。

■ 襲われないために

黒いウェア、整髪料や香水など甘い匂いのするものはハチの攻撃を誘発するので避ける。



■ハチの危険信号

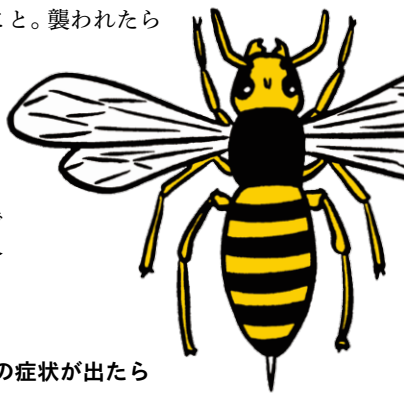
スズメバチは人に脅威を感じると、「周囲をまわりつくように飛び回る」「目の前でホバリングし、大顎をカチカチ鳴らす」といった威嚇をしてくる。このようなときは、背を低く保ち、ゆっくりその場から立ち去ること。襲われたらとにかく走って逃げる。

■刺されたら

周辺を指でつまんで毒液を絞り出すようにしながら患部を水で洗い流し、抗ヒスタミン剤を含んだステロイド軟膏を塗る。

■アナフィラキシー・ショックの症状が出たら

刺されたあとに、気分不良、震え、皮膚の発疹（じん麻疹）などのアナフィラキシー・ショックの症状が見られたら、「エピペン」という薬を注射し、一刻も早く病院へ。



※エピペンは関係医療機関で処方を受けられる。高齢者や、1年以内に刺されていて、その際に重い全身的な症状があった人はハイリスクなので注意を。



ダニ

mite

SFTSとは…

重症熱性血小板減少症候群の略。日本では2013年から5年間で230名強が感染し、死亡率約27%。発病者は三重県以西と石川県で見られ、高齢者に多い。死亡例はいずれも50歳代以上。

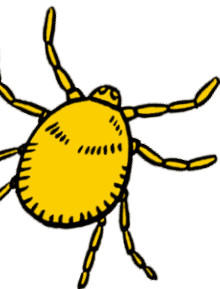
ときに死に至る感染症SFTSを媒介する。藪の草葉の裏などに生息する。

■ マダニから身を守る方法

なるべく皮膚が露出しないウェアを着て行動し、肌の露出部、ウェアの袖や裾、靴などには虫除けスプレーをかける。行動後は体をなで回したりして、ダニがついていないか確認する。

■ 咬まれたら

無理にとろうとすると、口器が皮膚に残り炎症を起こす。軟膏やクリームを塗り、テープで覆って窒息させるとよい。取れない場合は医療機関で除去してもらう。数週間は体調の変化に注意し、発熱などがあれば、医療機関で診察を受ける。SFTSの場合、6～14日ほどの潜伏期間のち、発熱、嘔吐、下痢などの症状が現れる。



監修

クマ：山崎晃司(東京農業大学教授)

ハチ・ダニ：野口いづみ(医師)

参考資料

『野外毒本』羽根田治著、山と溪谷社

林野庁

<http://www.rinya.maff.go.jp/j/routai/enzen/>

国立感染症研究所

<http://www.nih.go.jp/niid/ja/sfts/2287-ent/>

2016年6月15日 初版発行

2017年6月30日 第2版発行

制作

日本山岳遺産基金事務局

〒101-0051 東京都千代田区神田神保町1-105

神保町三井ビルディング 株式会社山と溪谷社内

<http://sangakuisan.yamakei.co.jp/>

e-mail: kikin_info@yamakei.co.jp